

2024

4

令和6年4月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻368号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあそび



公益財団法人
さわやか福祉財団

「地域助け合い基金」は 能登半島地震の被災地、被災者も支援いたします 皆様のご寄付をお待ちしています

「地域助け合い基金」では、令和6年能登半島地震を受け、石川県全域・県外被災地域・県外避難地域を特別対応地域とし、現地のニーズを踏まえながら通常のご支援枠を超えて応援いたします。

皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

- 能登半島地震復興支援のご寄付の場合は、地域を「**石川県**」とご指定ください。当財団のホームページからクレジットカードでご寄付が可能です。あるいは以下の金融機関宛にお振り込みください。金融機関の場合は、お手数ですがホームページまたは電話などにより、**石川県指定ご寄付である旨をお知らせください。**

(当財団HP「地域助け合い基金」ご寄付受付ページ)

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/fund/tasukeai/form.php>

- 当財団からも活動支援金を「地域助け合い基金」に拠出し、石川県をはじめ被災地・被災者の皆様に応援する活動を広く支援します。

お振り込み先

■銀行振込

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

三井住友銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 0095446

■郵便振替 (払込取扱票)

加入者名：公益財団法人さわやか福祉財団

口座記号番号 00110-7-709627

- * 「地域助け合い基金」では指定地域のないご寄付も常時募集しています。
- * 「地域助け合い基金」は、さわやか福祉財団が事務手数料を頂戴することはありません。
- * 「地域助け合い基金」をはじめとするさわやか福祉財団へのご寄付は、所得税・法人税等の優遇措置の対象となります。

さあ、言おう

2024年4月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

改めて、助け合いを広めよう！

生活支援コーディネーターの孤立と自治体の理解

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

“おたがいさん” を合言葉に

近隣地区に広がる助け合い活動

町分おたがいさん・下六おたがいさん（佐賀県佐賀市）

11 助け合い こんな活動やっています！

行く場所、することがある場所

認知症の人とパートナーの小さな農園

宝塚チャレンジファーム（兵庫県宝塚市）

14 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

地域の子どもたちを 地域が守り育てる

乙畑ひまわりスクール（栃木県矢板市）

20 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介／状況のご報告

24 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 20

狂った季節

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

28 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

29 NEWS & にゅーす

31 活動日記（抄）

㊦NPO法人サポートたむらの取り組み／㊦新連載のお知らせ／㊦みんなの広場 / 投稿募集

㊦さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・島 信一郎

改めて、助け合いを広めよう！

生活支援コーディネーターの孤立と

自治体の理解

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

「生活支援コーディネーターについて職場内にどのようなサポート・連携体制がありますか？」自治体の管理職の人と話をする際、こうした問いを時々投げかけてみる。多くの場合、課題も含めて状況を率直に語ってくれるが、中には組織的な説明にとどまり、ああ、生活支援コーディネーターとの距離があるのだろうか、推測する場合もある。

生活支援コーディネーターが新たな制度として登場して10年目を迎えることとなった。4月になり、また新しい生活支援コーディネーターや担当自治体職員が各地で配属されていることだろう。着実に活動が地域に根付いている自治体もあればそうではない自治体もある。地域づくりに時間がかかることは当然だが、生活支援コーディネーターが孤立して思うような活動ができていないという状況を耳にするのは本当にもったいないことだ。

生活支援コーディネーターは、「地域支え合い推進員」と添えられているとおり、まさに地域の支え合いを推進し、生活支援を地域で進める仕組みをつくる役割を持つ。国がこの制度をつくるとき、私も委員の一人として関わらせてもらったが、当時から明確に予測されていた将

来の介護人材難、財政難の見通しの中で、住民が地域の支え合いの仕組みづくりに主体的に関わる意味や価値を様々に議論した。当時のノートのメモ書きを改めて見返すと、〃これまででない位置づけの事業〃。住民に押しつけるのではなく主体的に関われるように〃。支える人も支えられる人も双方のいきがいのようになるように〃、そんな走り書きが残っている。新しい生活支援コーディネーターや担当自治体職員にそうした意義はしっかり伝わっているだろうか。

生活支援コーディネーターが孤立に悩む声は少なくない。「他の職員から楽な仕事と思われており、地域に出づらいう雰囲気がある」「上司や同僚に業務を理解してもらえず、やむを得ず他の業務を手伝い、そのあとに出かけることもある」等々。「地域の人たちへの働きかけは大変だけれども意義を感じている。ただ、職場で余分な仕事と言われて本当に情けない」と心情を吐露してくれた人がいた。委託先で他の部署の職員から、利益を生み出さないことを大声で悪し様に言われながら、悔しい思いを呑み込んで活動している人もいる。公費を受領して実施する大切な職務の目的がおよそ理解されていない。

一方で、「市も上司もバックアップしてくれ、地域の関係者も紹介してくれるので非常にやりやすい」「この事業は、とにかく住民の理解をどのくらい得られるかで決まるため、できるだけ外に出て、町内会、老人クラブ、民生委員、ボランティア関係の代表者らと勉強会を行っている。行政の具体的なサポートが大変ありがたい」、そんな声も聞いてきた。

生活支援コーディネーターは、地域の互助を広め、様々な人や社会資源をつなぐこれまでにない大切な役割を担っている。自治体は単に委託し、あるいは生活支援コーディネーターにただ任せるのではなく、しっかりと目指す姿を伝えて、長期的な視点で全面後押しする支援体制をつくり、ぜひその存在を地域社会に有効に活かして欲しい。

エ
広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



「おたがいさん」を合言葉に 近隣地区に広がる助け合い活動

まちぶん
町分おたがいさん・下六しもろくおたがいさん（佐賀県佐賀市）

高齢化と過疎化によって、昔あった近所づきあいが希薄になった地域が少なくありません。そんな中、住民同士が話し合って困りごとを助け合う有償ボランティアを立ち上げた自治会があり、それを参考に1年後に活動を開始したもう一つの自治会があります。地域住民の絆を再構築しようとする活動と、その広がりを取材しました。

（取材・文／東田 勉）

町分おたがいさん

「おたがいさん」
「お買い物ツアー」



佐賀市北部の久保泉町は、人口約3

6000人で高齢化率38・8%（2023年3月末現在）。同町には21の自治会がある。そのうち、計500人ほどの住民がいる「町分一」「町分二」の2つの自治会が、高齢者のちょっとした困りごとを住民同士で解決する有償ボランティアグループ「町分おたがいさん」を22年5月に立ち上げた。取材した第3火曜日は、月1回の「お買い物ツアー」モデル事業の開催



みんなで昼食。右上が横地さん、隣が福川さん夫婦、手前3人はサポーターの皆さん



買い物をする福川さん夫婦

日。午前11時に利用者とサポーターが公民館に集まり、車2台に分乗して市街地へ向かう。この日の利用者は、福川秀三さん（86歳）とヒロエさん（82歳）の夫婦。車の運転や付き添いをするサポーターは、神代光子さん（78歳）、小川千鶴子さん（78歳）、高島忍さん（79歳）だ。

一行はおそば屋さんに入って昼食を取り、楽しく語り合った後、スーパーで買い物をした。福川さん夫婦は、250円のチケット2枚をサポーターに渡す。福川さん夫婦は、土日は近くに住む息子が何でもしてくれるが、平日に市街地まで買い物に連れてってもらえるのはありがたいと話す。「車はありますが、高齢になったので近くの畑に行くときしか使いません。遠くへ行けないので助かるし皆さんのとの会食も楽しい」

町分一と町分二、2つの自治会が共同歩調をとったのは、長寿会（老人クラブ）が一緒だったからだ。長寿会会長で町分おた

がいさんの代表も務める横地幹夫さん（79歳）が思いを語る。

「昭和の頃の町分は、小学校、郵便局、商店、食べ物屋が立ち並び、近隣のまちからも買い物客が訪れる活気に満ちた地域でした。今では若い人が出ていき、高齢者が増える中、近所付き合いが減り寂しくなりました。困りごとがあっても頼める人がなく、施設に入れないという話も耳にしました。昔のように近所同士で助け合う、おたがいさん〴〵の仕組みを復活させなければ、住み続けられないと思ったのです。何か新しいことをしようと考えたわけはありません」

住民アンケートから生活支援「とにかくやってみよう」

町分おたがいさん立ち上げへの動きは、21年8月に長寿会で実施した生活の困りごとアンケートから始まった。

半数以上の高齢者が「困りごとがある」と答えた。「何とかしなければ」と思った横地さんは、民生委員、サロン世話人、自治会長などに声をかけ、住民同士で事務局をつくった。有償ボランティアによる生活支援活動のノウハウは、群馬県高崎市のSCで当財団職員の日崎智恵子を講師として、オンラインで勉強会を実施した。

一番多かった困りごとは移動支援だった。しかし、いきなり移動支援の仕組みをつくるのはハードルが高いので、無理なく始められる除草作業、ごみ出し、話し相手・見守り、電球の交換といった生活支援から始めることにした。250円のチケット4枚を購入してもらい、活動30分ごとにチケット1枚をサポーターに渡す。その他の相談にも柔軟に対応しようと決め、「1年間はお試し期間にして、とにかくやってみよう」と動き出した。

22年4月、サポーターを募る住民説明会を開催したところ、50〜80代の37人にサポーターとして登録してもらうことができた。利用できるのは住民全員で、年齢は問わない。告知のチラシを作り、同年5月の発会式を迎え、翌23年10月までで76件、

サポーターの実働も延べ277名と、ニーズに沿った活動は確実に広がっている。

立ち上げに伴う窓口業務用の携帯電話費用、チケットやチラシの印刷費等には、県社会福祉協議会の助成金を活用しながら自治会からも数万円を拠出した。事務局長の中村秀二郎さん（71歳）が経緯を語ってくれた。

「私たちの自治会では、かねてから古紙回収、不用品を持ち寄るバザー、地



町分おたがいさん
の中村さん（左）
と横地さん（右）



町分おたがいさんのサポーター交流会の様子

元の新鮮な野菜を販売する青空市などで活動資金を作っていました。日頃の住民の協力が役立ったかたちです」

立ち上げから1年以上が経ち、生活支援の活動にも慣れてきた23年9月、当初からニーズのあった移動支援に取り組むため、町分おたがいさんは「お

買い物ツアー」のモデル事業を開始。

オンラインの移動支援勉強会には、奈良県葛城市（本誌22年12月号掲載）の

SC田口研一郎氏を講師に招いた。現

在、福川さん夫婦のほか、住民1名にモニターとして協力してもらい、本格的な運用を目指して準備を進めている。

下六おたがいさん

「ごみ捨てに1時間かかる…」
みんなで助け合い活動立ち上げ

下和泉六自治会（通称・下六）は、人口約200人。「下六おたがいさん」を始めたきっかけは、おたつしや本舗きんせん金泉（金泉地域包括支援センター）に寄せられた「ごみを出すのに1時間かかっている」という住民の声だった。

下六は、広い田畑の中に集落が散在する。人口が少ないため、ごみステーションは2か所しかなく、一人暮らし高齢者15人と高齢者世帯17軒の中には

ごみステーションとの距離が遠い家もある。高齢者がごみ袋を持って休み休み歩くと、往復1時間かかるケースもあったのだ。

それを耳にした下六おたがいさんの林義孝代表（76

歳）や数名の住民が集まり、話し合いが始まっ

た。他の住民から「地域の清掃

にも参加しない住民が、困った

人を助けるなんて協力するわけ

がない」という

心ない声もあったが、「やって

みなければ分からない」「やり

ながらみんなで

解決しよう」という声が大半で、初動メンバーの「困っている住民を助けた」という思いも変わらなかった。

全住民を対象としたアンケート（複数回答可）を実施した結果、困りごとがあつて支援を依頼したい人が90名、協力できると回答した人も50名いた。

「やはり下六には助け合いが必要。これなら活動できる」と確信したメンバーはさらに

協議を進め、初動メンバーのほかにアンケートの中で「協

力できる」と回答した人の中から4人に声をかけ、計9人

で事務局を立ち上げた。先に活動をスタートしていた町分

おたがいさんから事務局長の中村さんを招いて、仕組み等

の勉強会を行ったほか、町分の定例会を視察してどのよう

な内容で行っているのかを学



されたおたがいさんの報告会の様子
下六おたがいさん
開催された
1月1日

んで参考にした。

「地域からの批判や意見の対立などたくさんの課題がありました。それを皆さんが話し合いで一つひとつ解決し、自然と役割分担もできていったように思います。『これまで採めごともあった自治会が、この活動を通して団結するようになった』という声も聞きました」と振り返るのは、地区担当の第2層S.C、真子紫布さん。

お手本にした町分おたがいさんの発足から1年後の23年5月、下六おたがいさんは、町分おたがいさんのメンバーも招待して発会式を迎えた。団体名は、町分にならって付けた。活動メニューは、買い物代行、話し相手・見守り、ごみ出し、除草作業。その他の困りごとにも相談に応じている。

町分おたがいさんと下六おたがいさんは、その後も悩みがあるときは連絡を取り合っているそうだ。

ごみ出しをサポート 見守りも兼ねて

下六おたがいさんの利用者、緒方喜久子さん（86歳）は、毎週ごみ出しをしてくれるサポーター、大島由紀さん（47歳）と談笑していた。

緒方さんは、昨年4月に夫を亡くしてから一人暮らし。要支援1で、杖歩行だ。長男夫婦が福岡に、次男夫婦が佐賀市内にいて、通ってきては通院や買い物を手伝ってくれる。しかし、平日朝のごみ出しだけはどうにも困っていた。

「自分でごみステーションまで運んだこともありすが、とても無理だと思いました。道がでこぼこで、杖では歩みにくいのです。最近家で転び、足腰が急に弱くなりました」

と語る緒方さんは、下六おたがいさんの常連の利用者だ。大島さんは、週1



ごみ出し支援の様子。左が緒方さん、右が大島さん

回緒方さん宅を訪ね、玄関先に出してあるごみを自分のものと一緒にステーションまで運ぶ。

「玄関先にごみが出ていないときはチャイムを鳴らします。安否確認も兼ねていますから」と大島さん。

下六おたがいさんのサポーターは現在43名、活動開始から今年2月までの実施件数は48件。草刈りの依頼が多いが、木の伐採や難病者の在宅介護のお手伝いと話し相手まで行っている。謝金はチケット制で30分300円。200円がサポーターに、100円が運営費となる。

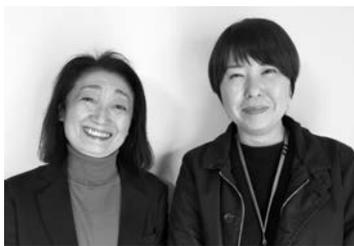
「考えるのも行動するのも、すべて住民」 住民主体の活動を引き出したSC

～第1層SCの谷口貴美子さんに聞きました～

佐賀市には15のおたっしや本舗があります。その中で、おたっしや本舗金泉（金立地区と久保泉地区担当）のエリア内に住民主体の助け合いグループが2つもできたのは、第2層SC・真子さんの働きによるところが大きかったと思います。

真子さんは町分でも下六でも黒子に徹し、「考えるのも行動するのも、すべて住民さん」という流れをつくってきました。例えば、事務局会や住民報告会するとき、真子さんは書記に徹します。メンバーの誰かが書記になると、その人が発言できなくなるからです。また、話し合いがスムーズに前へ進むように、議事録（何が話し合われたか）とレジュメ（次は何を話し合うか）を別々に作るといった細かな工夫もされています。活動開始に向けて、講師を招いての勉強会開催をお膳立てしたのも真子さんでした。

2つのおたがいさんが活動を開始できた理由は、何よりも住民の皆さんの「思い」です。しかし、思いだけでは進まないこともあります。きちんと分析し、進めるためには何が必要かを考えながら伴走した真子さんの存在は欠かせませんでした。



佐賀市高齢福祉課介護予防係の第1層SC・谷口さん（左）とおたっしや本舗金泉の第2層SC・真子さん（右）

寄って共有・解決す
るためだ。SCの真
子さんはどちらにも
出席して記録係を務
め、「町分（下六）
ではこうしています
よ」などと、互いの
情報が生かされてさ
らに活動が進むよう
サポートしている。
また町分では、お
たがいさん立ち上げ
と同時に「こうした
らできたよ!! 助け
合い活動づくりワー
クブック」と「おた

自治会だからできる
きめ細かな活動

校区と比べて狭く、住民の結びつきが密接な自治会では、困りごとがある

人や活動できそうな人が住民同士で分かる。下六では、自治会内に6つある班のリーダーを事務局に加え、事務局の支部が班に置かれる体制とした。このため、今ではほとんどの困りごとが

班内で解決できるといいう。
* * *
町分は毎月5日、下六は第2日曜日に会合を開いている。サポーターに前月分の謝金を渡し、情報や課題を持ち

「勉強の時点
うだ。
で使われたそ
ポーター研修
ドブックはサ
用され、ハン
ックがフル活
分のワークブ
ち上げには町
下六の活動立
た。もちろん、
して作り上げ
が克明に記録
を、真子さん

がいさんサポーターハンドブック」を
作成した。ワークブックには、どのよ
うにして助け合い活動をつくれればよい
かがまとめてある。ハンドブックは、
サポーターの心得集だ。町分おたがい
さんが立ち上がっていく過程で話し合
われた内容、積み上げられたノウハウ

では十分理解できませんでしたが、実
際に活動を始めてみて、どれだけワー
クブックに助けられたことか
と、下六事務局の川上晶子さん（65歳）
は町分への感謝を惜しまない。町分の
中村さんはそれを聞いて、「おたがい
いさん」ですからね」と笑った。

金泉地区では、近く金立町でも助け
合い活動が立ち上がるといふ。住民の
絆を再構築しようとする久保泉町の取
り組みとその広がりをも、各地で参考に
してもらえたらと願う。

※文中の肩書は、
本年3月末現在のものです。



下六おたがいさん
の事務局メンバー。
前列左・飯笹幸江
さん、同右・林富
子さん。後列左・
川上さん、同右・
林義孝さん

町分おたがいさん・下六おたがいさん

<町分おたがいさん>

佐賀市久保泉町町分地区で2022年5月から始
まった有償ボランティア活動。除草やごみ出し
などのちょっとした困りごとを、登録サポー
ターが30分250円で手伝う。現在、外出支援と
して、昼食と買い物セットになった「お買い
物ツアー」のモデル事業にも取り組んでいる。

<下六おたがいさん>

佐賀市久保泉町下六地区で、2023年5月から
始まった有償ボランティア活動。買い物代行や
除草作業などのちょっとした困りごとを、登録
サポーターが30分300円で手伝う。自治会内
の6つの班に事務局員を配置し、顔馴染みの関
係できめ細かな助け合いを実現している。

●連絡先／〒840-8501 佐賀市栄町1-1
佐賀市高齢福祉課介護予防係・谷口
電話 0952-40-7256



行く場所、することがある場所 認知症の人とパートナーの小さな農園

宝塚チャレンジファーム（兵庫県宝塚市）

行くのが楽しみになるファーム

住宅街にある小さな畑。毎週火曜日の午前中にここで行われているのは、認知症などがある人と地域ボランティアの「パートナー」がベアになって農作物を育てる「宝塚チャレンジファーム」だ。2021年1月から活動を開始し、地域包括支援センターからの紹介でこれまで延べ8人を受け入れ、現在は4人の当事者と8人のパートナーと一緒に活動している。土に触れ、季節ごとに新鮮な野菜が収穫できる農作業は、それまで閉じこもりがちだった

人にも良い刺激になる。途中で休憩しながらでも、うまくできないことがあっても、おしゃべりが弾み皆楽しそう

「最初はほとんど言葉が発しなかった方もだんだん会話するようになって、しばらくすると毎週ここへ来るのを楽しみにしてくださるようになります」と話すのは、ファーム代表の谷節子さん。



チャレンジファームの様子。パートナーたちが本人の得意不得意を理解して作業を頼む



谷さんが「畑で何かできたら」と考
え始めたのは20年12月頃。きっかけは、
地域包括支援センターで見た要介護者
が取り組む農業のチラシだった。その

ことを畑を所有している知人に話すと、
快く畑を貸してくれることになり、翌
21年1月には活動を始めることができ
た。最初からビジョンや活動を決めて
いたわけではなく、包括や地域住民と
相談する中で、認知症などの人が行く
場所、することがある場所としてスタ
ートすることになった。谷さんは、認
知症をテーマとする専門職と地域住民
のつながりの場「宝塚認知症オレンジ
ロバネットワーク」にも参加しており、
ここでもファームの話をしたところ、
取り組みに賛同した4人がパートナー
となった。

☆^ノ☆⁺ 他人同士、面倒を見合うのもいい

片岡尚武さんと明子さん夫妻は、21

年3月からファームに参加するようにな
った。尚武さんは14年から認知症の
症状が始め、22年に亡くなるまでフ
ァームに通った。

「体が丈夫で出かけるのが好きだった
ので、介護は大変でした。でもファ
ームに行くようになり、皆さんに自然に
接していただいて、週1回通えるファ
ームは本人にも私にも非常にありがた
いサイクルでした。1人でも多くの方
に、こういう活動に参加していただ
けたら」

明子さんは、現在もパートナーとし
てファームに参加している。

「尚武さんがご存命の頃から、ファ
ームでは明子さんには別の方のパートナ
ーをしていたいただきました。夫婦でペ
アになると、『迷惑をかけないように』
とどうしても周囲に気を遣われますか
ら」と谷さん。

元国家公務員で、パートナーとして

活動する中川良次さんも、「他人同士
で面倒を見合うのは、摩擦も少なく
いいんじゃないでしょうか。それに、
皆さんそれぞれ個性がありますから

『認知症の人』とひとくくりにはでき
ないと、ここへ来て思うようになりま
した」と話す。中川さんは、最近施設
に入ったうつ傾向の高齢女性をファ
ームまで送迎していた。

「『寂しいけれど外に出るのは怖い』
とおっしゃって、ファームへの参加に
も波がありましたので、家が近かった
こともあって私が個人的に送り迎えし
ました。歩きながらいろいろな話をし
て、人生の先輩ですから勉強になるこ
ともたくさんありました」

そうするうちに、女性はファームへ
の参加を楽しみにするようになったそ
うだ。

谷さんと年の離れた近所の「親友」
澤園幸代さんは、谷さんからファーム

に誘われた。

「認知症サポーター養成講座を受講したり、谷さんと一緒にオレンジロボネットワークで勉強するうちに父親が認知症になり、趣味でやっていた畑がだんだんできなくなっていく姿も見ました。ファームで若い世代と交流することで、笑い声と話す機会が増え、高齢の方が若返っていると思います」

☆今できることを尊重して

関係者が集まる定例会は、2か月間1回行っている。

「ペアになるパートナーは毎回同じ人で、少しの変化にも気づき、細やかに対応できるようにしています。そして定例会では、お一人お一人の様子や今後の課題も皆で話し合います」と谷さん。

「その人が今できることを尊重して、困っていれば手を差し伸べるのが



前列左から、谷さん、御殿山包括の野木さん、片岡さん。
後列左が中川さん、右が澤園さん

ファームさん。おかげで私たちも、行く場所、することがある場所を必要とされている方に安心してご紹介できます」と話すのは、連携先である御殿山地域包括支援センターの野木淑加さん。「認知症の方が、お客さんでなく主体的に活動するのは、実は難しいもの



市社協の河村未来さん(左)と早瀬さん(右)

々の活躍の場にもなっている。地域共生のお手本ではないかと思えます」と市社会福祉協議会所属のS.C.、早瀬瑛さん。

活動を楽しみにして、30分前から畑に来る人もいるというチャレンジファーム。谷さんは「行く場所があることは、誰にとっても大事。みんなに助けてもらいながら、これからも一緒に活動していきたい」と笑顔で語ってくれた。

(取材・文／塩瀬 潔泉)

／いきいき わくわく／

子どもと一緒に 地域で輝こう



地域の子どもたちを

地域が守り育てる

おつはた
乙畑ひまわりスクール（栃木県矢板市）

矢板市立乙畑小学校のランチルームや校庭は、放課後になると、放課後子ども教室「乙畑ひまわりスクール」に様変わりします。「地域の子どもは地域で育てる」を合言葉に、地域のシニアボランティア約50人が交代制で子どもたちを見守っています。（取材・文／森 祐子）

● 地域のシニアボランティアで 子どもを見守り10周年

下校時刻になると、乙畑小学校のランチルームは「ただいまー！」という元気な声でにぎわい始める。子どもたちが小学校の昇降口を出て、裏庭を回り、同じ校舎のランチルームに「帰宅」したのだ。「おかえり」と笑顔で迎えるのは、地域に

暮らすシニアボランティアの皆さん。子どもたちはロッカーにランドセルや上着を収めると、友だちとふざけ合いながら宿題を取り出して席に着く。「乙畑ひまわりスクール」の始まりだ。

ひまわりスクールは、学童保育ではない。塾でもない。地域のボ



矢板市立乙畑小学校

ランティアが運営する子どもたちの居場所だ。保護者の就労等に関わりなく全児童を対象として2014年に開校し、今年10周年を迎えた。

●「地域の子どもたちは地域で守る」

ひまわりスクールが平日毎日開催し、地域住民主体で10年も継続されてきたことに驚くが、会長の市村謙作さん（76歳）は、「地域の子どもたちは地域で守るのが当然ですよ」と、あっけらかんと話す。

現在は、参加児童55名、スタッフ48名（男性25名、女性23名）、指導員1名の大所帯でにぎわうひまわりスクール。始まりは10年前、地域の行政区长をしていた市村さんが、同小学校の卒業式に招待されたことだった。その年、卒業生はたったの2名だった。地域の過疎化を痛感し、子どもたちのために何とかしなければと焦りを感じたそう

だ。
地域に子どもたちを呼び戻すために、市村さんはいろいろなアイデアを考えた。何か大きな行事

をやるうか。はたまた、英語教育に力を入れるか。そんな中、共働き家庭が増えているのに、同小学校区に学童保育がないことに気がついた。「これだ！」と思った。

校区にある5つの行政区長に集まってもらい、「ボランティアを募って、放課後の子どもたちの見守り活動をしよう」と呼びかけた。矢板市教育委員会生涯学習課にも協力を仰ぎ、国が推進する「放課後子ども教室」として校舎内のランチルームを借りることになった。あとは、ボランティア募集だ。

市村さんは手当たり次第、友人に声をかけてもらった。「資格がないから無理だ」と断られても、「大丈夫、見守るだけでいいんだ」と説得を重ねた。地域の集会で、「あの家のご主人が定年退職して家にいるらしい」と聞きつけると、訪ねていつて口説いた。そんな市村さんの熱意が実り、14年4月8日、乙畑ひまわりスクールは子ども13名、ボランティアスタッフ37名でスタートした。指導員も含めてスタッフが全員シニアのボランティア

なので、子どもたちの月々の利用料はおやつ代の2000円だけだ。

● ひまわりスクールの一日

ひまわりスクールは、子どもたちが下校する1時間以上前に動き始める。週5日活動する指導員の星和貴さん（71歳）が消毒液でテーブルを拭くなど、子どもたちを迎え入れる準備を始める。や



子どもたちを迎える前にテーブルを拭く星さん



その日の当番スタッフがおやつ準備

がてその日の当番スタッフ3名ほどが集まり、おやつ仕分けやお茶の準備を始める。

14時40分、子ども

たちはここへ来てまず宿題に取りかかる。ボランティアスタッフは子どもたちから「先生」と呼ばれ、宿題を教えたり、遊

んでいる子どもに声をかけて先に宿題をするように促したりしていた。上の学年の子が下の学年の子に教えてあげる微笑ましい姿もある。

15時30分、おやつ時間。子どもたちは楽しそうにおしゃべりしながらペロリとおやつを平らげると、一目散に校庭に飛び出していった。ここからは外遊びの時間。校庭の遊具や一輪車、追いか



放課後、子どもたちが元気にひまわりスクールへ



みんなで思いっきり外遊び



分からないところは「先生」に聞きながら、
まず宿題を片付ける

けっこなどをして元
気に遊びまわってい
る。

ランチルームを見
ると、ほうきやちり
とりを持って掃除を
する子どもたちの姿
が。聞けば、席の列
ごとに掃除当番があ
るのだとか。その子
たちも、掃除が終わると校庭
に飛び出していった。

17時まで外遊びを楽しんだ
ら、あとはランチルームで遊
びながら保護者のお迎えを待
ち、18時半には閉館となる。

夏休みなどの長期休暇中も
平日は開催され、午前3名、
午後3名の1日計6名で運営
する。ボランティアスタッフ

だけでは人手が足りないこともあるので、通って
いる子の保護者も夏休み中に1回は手伝ってもら
うようお願いしている。ひまわりスクールの様子
を理解してもらえ、良い機会にもなっているそう
だ。

● ボランティアにもいいことが

指導員の星さんは企業を定年まで勤め上げて64
歳で退職し、自宅で過ごす日々だった。たまたま
ひまわりスクール前任者の指導員と知り合いで、
そろそろ任期が終わると聞いて、自ら「ひまわり
スクールで活動した
い」と志願した。週
5日も子どもたちの
相手をするのは大変
では、と聞くと、「い
いや、子どもたち
と一緒に遊んでもら
えますから、楽しい
ですよ」と言って笑



郷原さん（左）と市村さん（右）

～ひまわりスクールが楽しいから～



ひまわりスクールに通う小林ななみさん（3年生・左）と母親ののりえさん（右）

「地域の高齢者の方々と日常的に触れ合えることで、子どもは社会を学べます。娘は少し感じやすい性格で、入学当初は『学校に行きたくないけど、ひまわりスクールが楽しいから行く！』と言って、何とか切り抜けることができ、とても感謝しています。ここはボランティアの皆さんのおかげで、子どもの居場所になっていると思います」（のりえさん）

「夏休みにひまわりスクールの先生たちが教えてくれた、お手玉とかあやとりとかの昔遊びが楽しかったです。コマ回しはまだ練習中です！」（ななみさん）

った。「うちの子もそうでしたが、子どもたちは私たちが言ったことの半分しか聞きません（笑）。宿題が終わっていないくてもすぐに遊び出しますか

らね。そういう大変さはもちろんありますが、それ以上にやりがいがあります」

月に3回活動する郷原康夫さん（80歳）は、孫の入学をきっかけに活動に加わった。子世帯と同居するために同校区に転居してきたため知り合いが少なかったが、ここで活動する中で地域に知り合いが増えた。ひまわりスクールで過ごす孫の様子を見て、異学年の仲間と広く交わることに魅力を感じており「孫も私も、ウィンウィンなんですよ」と話してくれた。

● 学校が地域ボランティアから得られるもの

「教員時代に目が行かなかったことを教わる日々です」と語るのは、市教育委員会生涯学習課の海瀬裕之さん。生涯学習課はひまわりスクールの事務局として、約50人いるボランティアの活動希望日を取りまとめ、毎月のシフト表を作成している。地域ボランティアには負担となりがちな実務的な部分をサポートしている、縁の下の力持ちだ。



矢板市教育委員会の
海瀬さん



乙畑小学校の桑原校長

「子どもたちの人間形成に携わってください、感謝ありがとうございます」と話すのは、同小学校の桑原裕子校長。昨年度赴任してきた桑原校長は放課後、校庭で子どもたちが高齢者と遊んだり、叱られたりしている姿を見て驚いたという。

「放課後の校庭がこんなに地域の人でにぎわっている小学校は初めてでした。それに、教員が学校行事の一環としてザリガニ釣りをしてザリガニ釣りをしたいとか、野菜を育てたいといったときに、地域に詳しくないのでどうしたらいいのか分かりません。しかし乙畑小はひまわりスクールのボランティアの皆さんが毎日いらっしゃるので、教員が相

談に行って教えていただいたり、手伝っていたりいたりしています。ひまわりスクールに出合っただけで、『私たち教員は外から地域の中に入って、地域の子どもたちをお預かりしているのだ』という視点が生まりました」とニコリ。そうした視点が生まれた背景には、小学校とひまわりスクールの距離の近さが影響している。「一般的な学童保育は社会福祉課の管轄で小学校とほとんど関わりがないのですが、放課後子ども教室は教育委員会の管轄なので、学校とも関係が近くて連携が取りやすいのです。教室とは違う子どもたちの新たな側面を見られるという意味では、何ものにも代えられません」

* * *

この3月、乙畑小学校から18名の児童が卒業していった。市村さんは「最初は数年続けば大したものだと思っていたのに、まさかこんなに続けられるとはなあ」と感慨深げだ。

子どもたちは、家族だけでなく、地域にも育てられていく。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごとと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、子ども食堂、高齢者の生活支援、不登校の子どもと保護者への支援活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

神奈川県横浜市

お腹も笑顔もいっぱい

らんらん食堂

助成金額 15万円

「お腹も笑顔もいっぱいの子ども食堂」を目指して2020年に発足したらんらん食堂でしたが、コロナの感染拡大で市の施設が使用できなくなったため、地区センターで6月に仮オープンしました。特に子どもたちには、食後に工

作や読み聞かせのほか、学習支援等も行っためのスタッフもいるということです。

本基金の助成金は、貸室使用料や調理器具等の備品、消耗品をそろえるために活用されました。

23年2月からは無料



らんらん食堂での食事の様子

で使用できる市の施設で開催できるようになり、テーブルの配置も、隣でも向かい合う人同士でも話しやすいように工夫しているとのこと。取り組みは他地区にも口コミで伝わり、若いファミリーや3世代家族、子どもたち同士、高齢者らが毎回訪れておしゃべりも弾んでいるそうです。

温かい食事に喜ぶ一人暮らし高齢者の声などを聞き、「楽しい」食事を届けられていることを実感すると同時に、お腹の空いている子がお腹も笑顔もいっぱいにしてくれることを願って活動しています。

京都市

ボランティア活動から 互いに気にかけて合う好循環へ

不動講町笑顔の会

助成金額 15万円

発足から約10年、高齢者の見守り、庭木剪定や障子張り、防犯・防災に関する啓発、単身高齢者の相談会や茶話会等のボランティア活動を行っている不動講町笑顔の会。ボランティアとして参加した人は延べ17人となり、活動が町内でも一定の存在感を得てきたことから、今後より一層活動

を強化するため、本基金の助成金で、作業用の足場台、ヘルメット、物置、のこぎり、竹ぼうき、草刈り機等を購入されました。

ボランティア活動を通じて高齢者が気軽に困りごとを相談できるようになったとのこと。また、老人会のクラブ活動とも相まって皆が仲良くなり、互いの体調を気にかけて合うような好循環が生み出されているということです。仲の良い町内会になって、近隣町内からもうらやましがられているという笑顔の会。「今後も多面的な体制確立を強化していきたい」と報告を寄せてくださいました。

大阪府高槻市

不登校の子どもの 居場所づくり

ひとまちみらい高槻

助成金額 15万円

引きこもり状態にある若者の居場所づくり、生活困窮者の自立支援等を目的に2015年から活動してき



活動の様子

「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域助け合い基金は、能登半島地震の被災地・被災者にも支援を実施してまいります。
引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしく願い
申し上げます。

(3月15日 当財団ホームページ開示時点)
◎寄付受付額
このうち当財団より1億4162万1000円を供出
238件 1億7391万9836円
◎助成実行額
1084件 1億6835万9064円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を
開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。
寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、
上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

た、ひとまちみらい高槻。不登校の子どもと保護者のためのサロンとフリースペースを開設・継続するため、本基金に応募されました。助成金を、施設利用料、遊び道具・書籍・教材・園芸用品その他の購入に活用して、サロン、子ども居場所、勉強会を開催し、勉強会での活動メンバーの経験談は参加者に喜ばれたということです。また、他団体の代表者が参加したり、一度参加した人が他の人に声を

かけて一緒に参加するといった広がりもあつたそうです。「居場所を本当に必要としている子どもに情報を届けることが難しいと感じた」という課題とともに、「学校に通っている・いないに関係なく、地域全体が安心して過ごせる場、前向きに学べる場となるように活動していきます」との報告をいただきました。

情報をお寄せ
いただきました

「さみしい孤食から みんなでたのしい共食へ」

NPO法人サポートたむら（福島県田村市）の取り組み

NPO法人サポートたむらでは、住民主体による介護予防・日常生活支援総合事業として、訪問型サービスB、通所型サービスB、訪問型サービスD等を、また、一般介護予防事業として主に一人暮らしの高齢者を対象とした配食サービスを立ち上げてきました。

配食サービスで利用者の安否確認や偏食への対応は行っているものの、ある研修会で「一人暮らし高齢者は夜が寂しい。一人で食べる夕食は味気ない」という発言を聞いたことから、利用者が求めるものはそれへの対応ではないかと考えました。

そこで、この3月から新たに居場所も兼ねた多世代型の地域食堂「みんなの食堂」をスタート。地元の特別養護老人ホームが場所を提供、民間事業者が食事を準備し、サポートたむらが利用者の募集と送迎、宣伝活動を担当するという協働で実現したということです。

開催は毎月第2金曜日の17～18時、参加費は1回300円。サポートたむらでは、「健康的な日常生活を送るために、バランスの取れた食事を摂るだけでなく、誰かと一緒に楽しく食事をする 것도大切。心身の健康を維持するためにも孤食を避け、みんなで『共食』を楽しんでいきたい」と呼びかけています。



「みんなの食堂」で食事と
交流を楽しむ利用者たち

問合せ

福島県田村市滝根町菅谷字堂田250-1
NPO法人サポートたむら 理事・安斎
電話 090 (2270) 3110
メール ootakimaru7@ark.ocn.ne.jp

ジェンダーの
視点から

人生 100年時代を 生き抜く知恵

20

狂った季節

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

今年も桜の季節がやってきた。年を追うごとに、開花の時期が早まっている。昨年は観測史上もつとも暑かった年といわれるが、私の周囲でも季節はずれの異常な現象がみられた。

毎朝、ラジオ体操で訪れる靖国神社の夜来香イエライシヤンが6月と8月に開花した。夜来香は、戦時中に山口淑子が李香蘭の名で発表してヒットした歌でお馴染みだ。第二次大戦中ビルマ戦線に参加した兵士たちが、戦後ビルマ（現ミャンマー）から取り寄せ靖国神社に寄贈したものである。

毎年、冬季には引き抜いて室内に保存し、春になると植え替える。淡い黄色の小さな星形の花が房になって咲く、きわめて地味な花だ。どんな香りがするのか大いに期待していたが、ほとんど匂わないのはがっかり。現地ではかなり匂うようだが、おそらく日本の風土には合わないのだろう。11月には外堀の土手に並ぶ桜のうちの数本が開花した。これまでも季節はずれに咲く桜はあったが、せいぜい1、2輪程度。ところが昨年は、花見ができるほど盛大に咲いていた。

そして12月にはビワの花が満開。通常は晩春か初夏に咲くはずだ。おそらく今年は、実がつかないのではなからうか。そして今年は、1月半ばに梅が咲き始めた。季節はずれの開花を楽しむというよりも、何か不吉なことの予兆ではないかと恐ろしくなる。

レイチェル・カーソンが名著「沈黙の春」で、化学薬品による自然環境の破壊や生態系の危機に警告を発したのは、今から半世紀あまりも前のこと。除草剤や化学肥料によって、自然界からは虫、鳥、魚が消え、春になっても鳥の鳴き声も聞こえないという不気味な世界を描き出した。

快適な生活を求めて、人びとが消費する電力や車は、化石燃料を必要とする。その結果、排出される大量の二酸化炭素が気候変動や地球の温暖化をもたらす。氷河がとけて洪水が発生し、雨が少ないために砂漠化が進む。その一方で、海面水温の上昇によるエルニーニョ現象が台風や大雨につながる。このところ世界各地で自然災害が頻発し、

家や財産、時には命までも失う人が続出している。解決策はどこにあるのだろうか。太陽光や風力などの自然エネルギーの供給は不安定で、国土の狭い日本では、必要とする電力のすべてを賄うのは難しい。かといって、原発に頼ることに抵抗がある。

もっとも確実なのは、私たちの生活水準を少しばかり引き下げて、ある程度の快適さを犠牲にし、不便さに耐えることだろう。

電気代が値上がりしたので、この冬は暖房の温度を20度に設定してみた。大丈夫かなと思ったが、慣れてしまえば何のことはない。ヒートテックの下着や重ね着、時にはホカロンを貼り付けることで乗り切ることができた。

世の中には未だに経済成長を求める人もいるが、成長のつけが自然環境の破壊につながったことは確かだ。狂った季節を元に戻すのは容易ではないが、少しでもましな地球を取り戻し次世代に譲り渡すことに努めたい。

～エッセイ新連載のお知らせ～

5月号から、
お二人のエッセイがスタートいたします。
どうぞご期待ください！

医療法人財団石心会理事長、川崎幸クリニック院長、当財団評議員

杉山 孝博さん

患者・家族と共につくる地域医療や、認知症治療に長年取り組まれています。

タイトル

「共生社会—認知症との新しい向き合い方」

公益財団法人Uビジョン研究所理事長、当財団評議員

本間 郁子さん

高齢者が施設でより良く生き、
より良い最期を迎えられる社会を目指して活動されています。

タイトル

「人生100年 地域とつながる施設とは」

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記**（抄）

**2024年度
実施事業・プロジェクトの紹介**



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2024年2月1日～2月29日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (69件)

(都道府県別50音順)

北海道	山田 智子	東京都	赤松 高明	加藤 さつき	高本 照久	
丸藤 競	群馬県	小野島 一	木村 利雄	関戸 進	名雪 君子	
渡部 保代	埼玉県	木下 清	菅原 敬子	三重県	福岡 亨二	
宮城県	埼玉県	久保 郁	鈴木 洋治	片山 幾代	山口県	追中 富美子
氏家 郁郎	小野内 智子	篠原 徹	鶴山 祐子	三宅 修司	滋賀県	愛媛県
内海 春雄	中崎 朱美	柴田 恭伸	平井 昌利	谷仙 一郎	松浦 正和	田中 徹
山形県	千葉県	永島 崇子	新潟県	京都府	加地 保裕	高知県
高梨 英子	石毛 英夫	仲田 明子	長野県	大阪府	佐賀県	中平 由起子
福島県	佐藤 悦子	中村 豊	筒井 庸子	遠藤 知賀子	西田 京子	大分県
須貝 一男	館里 枝	名執 雅子	水沢 芳夫	寺井 正治	木ノ下 素信	沖縄県
茨城県	藤本 裕一郎	野見山 國光	朝田 充	安居 正	上地 武昭	
橋口 栄彦	増元 秀雄	原島 敏子	黒田 欽子	渡辺 浩一		
栃木県	三勢 光俊	松浦 隆史	樋口 広寿	奈良県		
菅野 忠雄	森田 剛	宮沢 邦子	古橋 和子	山出 哲史		
菅野 安子	弓削 規子	山下 多鶴子	愛知県	広島県		

さわやかパートナー法人 (7件)

(50音順)

- アシードブリュー株式会社
- 近畿労働金庫
- 草野産業株式会社
- 一般財団法人住友生命福祉文化財団
- 株式会社榎屋
- ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社
- 社会福祉法人緑成会
- 特別養護老人ホーム緑の郷

一般で寄付 (3件)

(50音順)

- 黒田 欽子 (2千円)
- 河野 昭三 (3千円)
- 株式会社WIN 竹内 宏樹 (1万円)

NEWS

& にゆーす



1年間の研修を終えて

「つながり」を学んだ1年間

東京都教育委員会 三浦 里沙

さわやか福祉財団での1年間を表すと、「つながり」という言葉になりました

す。教員として教育現場に在るだけでは出会うことのできない方々にめぐり会い、多くのことを学ぶことができました。また、近畿ブロック担当として研修や現場に行かせていただき、その地域ごとの課題にそれぞれの方が熱い想いをもって取り組み、解決していることに感銘を受けました。

大阪府や京都府のSC情報交換会で事務局を担当させていただいた中では、SC同士が横につながり相談し合える環境づくりをし、今ある状況を良くするための仕掛けや仕組みづくりを行うことが重要だと感じました。そして、仕掛けや仕組みをつくるためにはビジョンを共有すること、また、誰のために、何のためにやっているのかを明確にすることが大切だと感じました。「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」での登壇者の発表や居場所の視察を通して、居場所には笑顔

と思いやりがあふれており、温かく受け入れてくれる場所には人と人とのつながりが生まれるのだと感じました。また、地域で助け合い、人と人とのふれあいを大切にする互助の活動は、地道に行うことが大切だと感じました。

教育現場においても、児童・生徒、関係機関との連携は重要であり、相手の話を傾け、コミュニケーションを円滑に取ることは重要だと再認識しました。今後は、財団で学んだことを生かし、人同士のつながりを大切にできるような現場づくりをしていきたいと考えています。さらに、組織運営を円滑に進められるよう、求められていることに応じたビジョンを持ち、リーダーシップを発揮できるように尽力いたします。

1年間ありがとうございました。ございました。



皆で助け合う地域づくりを

神奈川県 大方 彩友美

この1年間、共生社会推進担当として山梨県と神奈川県を担当させていただき、アドバイザー派遣事業などを通じて自治体や社会福祉協議会の皆さんや、地域で支え合い活動をされているたくさんの方の皆さんにお会いすることができました。地域づくりに試行錯誤しながら取り組まれる自治体や協会の皆さんの最前線での様子からは、行政の仕事に戻ってからの共生社会づくりのためのヒント、そして居場所での住民の皆さんとのふれあいからは、私自身が心豊かに生きるための大切な学びをいただきました。

財団の「新しいふれあい社会」の理念と地域の支え合い活動から学んだ一番大きなことは、支え合い活動をする

ことが、単に介護予防や人口減少に対する担い手不足の方策として存在するのではなく、支え合いから生まれる思いやりや優しさのキャッチボールが、支える側・支えられる側両方の人生を豊かにし、生きる力を生んでいく点です。

新潟県の河田瑠子さんが代表を務める「実家の茶の間・紫竹」は正にそういった居場所です。大変思い出深い場所になりました。紫竹では、高齢であったり体があまり動かせなかったりしても、話し相手や茶菓子の袋詰めなど、できることで役割を得ていきいきとした表情をしている方がたくさんいました。河田さんの「今日、自分が何回ありがとうと言えたか数えてみて」という言葉はとても心に残っています。

「ありがとう」という言葉が言えたということは、居場所に来ている人たちに支え合いの出番をどれだけ生み出せ

たかということでもあり、自分も誰かを助けるだけでなく、助けられている存在だと気づききっかけとなりました。今後は、より多くの方が自分らしさを生かしながら皆で助け合い、安心して暮らせる地域づくりを、行政の仕事を通して進めてまいりたいと思っております。

短い間でしたが、本当にありがとうございました。



さわやか活動日記(抄)

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

column

京都らしく、柔らかく、楽しい！ SC情報交換会実行委員会主催 「みんながつながる情報交換会」

■京都府 ■担当 共生社会推進担当・三浦 里沙

3月7日、京都府の「みんながつながる情報交換会 Vol.2」が開催された。主催は情報交換会実行委員会。委員会メンバーは、久御山町の松下一恵氏、大山崎町の富田未記氏、南丹市の上蘆和子氏、宇治市の松

尾まみ氏によるSC有志4名と、府健康福祉部高齢者支援課の主幹兼係長田中弘和氏、岡田美也子氏、さわやかインストラクター古海りえ子氏、当財団(目崎、三浦)。2023年度から始まったこの情報交換会は、

まず5月に松下氏が近隣市町村やつながりのあるSCに声かけし、前身となるSC情報交換会を開催。10月には有志SCと府も実行委員に加わり「みんながつながる情報交換会 Vol.1」を開催した(本誌23年12月号掲載)。SCがそれぞれの地域で日頃取り組んでいる活動について「知り」、悩みや疑問を「共有」し、気軽に話せ、そしてSC同士が「前向きにつながる」出合いの場になるように企画している。

この日の参加者は、京都府内のSC23名、行政2名、保健所1名。



京都府「みんながつながる情報交換会 Vol.2」の様子

司会進行は上蘭氏。情報交換会発足の経緯を松下氏が説明。そして古海氏から、「SCは地域住民の近くにおいて、住民と一緒に人と人をつないでいく魅力的な仕事。SC同士が助け合い、SCが一步を踏み出すときの勇気づけにこの情報交換会がなるように」と応援コメントがあった。府からは、情報提供として23年度に開催されたSC初任者研修会、視察研修、生活支援体制整備事業推進研修会、地域交響プロジェクト交付金パートナーシップミーティングの報告があった。

企画を練り、カフェのような雰囲気の中で自由に対話するワールドカフェ風に行うこととした。テーマは、申し込みの際にアンケートを取って決定した「SCの魅力・協議体」「ニーズ把握」「ネットワークづくり」「活動創出」。1回目のグループワークはテーマごとのグループに分かれて行った。2回目は、進行役を残し参加者が話し合いたいテーマに移動して行った。意見として「地域の子どもや親世代を巻き込むと高齢者が元気になる!」「楽しいことができるのが魅力」「地域課題をどうやって広げていくか」等が上がった。感想では、SCになつて3か月の参加者から

「情報を共有でき学ぶことができた。気になることをまた後で聞こうと思う」など前向きな意見があった。全体として、京都らしい柔らかい雰囲気で進んだ情報交換会。参加者の意見に共感し、新しいことを知る機会となり、うなずきあり笑いあり、発言に対して応援するための「イイネ!カ

ード」もたくさん上がって、話は尽きることがなかった。今後もこの情報交換会に継続して取り組んでいけるように、実行委員に新しく宮津市のSC大江健太郎氏、与謝野町のSC長島悦子氏に加わり、SC同士の輪が広がっている。京都府では、24年度も引き続き情報交換会を開催する予定である。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

やってみたい活動に向けて 3回目住民勉強会を開催

■ 田上町（新潟県）

〔2月7日〕昨年10月の住民フォーラム後、助け合いの創出を目的に勉強会を重

ねてきた田上町の3回目の勉強会が開催され、31名が参加した。フォーラム、勉



強会共に、第1層SCと協議体、行政が一緒に取り組んだ企画である。フォーラム参加者でアンケートに名した人たちを対象に、1回目は昨年11月に当財団が関わり「様々な助け合いの形を知る」と題し、助け合いの目的・課題を共有した。2回目は12月に助け合いの実践者である支え合いのしくみづくりアドバイザー、河田瑠子氏を講師に「実際の活動を知る」と題し、自分のやりたいことのイメージを膨らませることを狙って開催。そして、3回目となる今回は、財団が関わり「思いを語り合おう」と自分のやりたいこと・思いを共有し、仲間をつくることを目的に開催した。

行政・SC・県との事前打ち合わせで、2回目の勉強会の内容や反応を共有し、3回目の内容について詰めた。2回目では河田氏が質疑応答の時間を多く取った。始める上で大事なものは「何をしたいのか」「何のためにするのか」という目的を明確にすること。人が集まる要因は「何でも完璧にせず、手助けしようと思ってもらえる環境づくりが大事」など、具体的な質疑応答が行われ、参加者の心が動き意欲が前進している。3回目は講義よりも参加者同士で話し合う時間をつくるのが大事ではないかと提案し、上記のような内容で質疑応答は活発なやり取りとなった。

終了後のアンケートには25名が回答し、「支え合い助け合いを実現したい」13名などの回答のほか、「グループワークの発表会は非常に役に立ち、今後参考にしていきたい！」「みんなの思いの共有はまだ足りない？」「この会に同じ地区の方がもう少しいてくれたらと感じた」等の意見が見られた。また、「居住地でできること、できそうなことから始めたほうがいいと思う」「具体的にどこでできるのかを決めて進めていく」「やれることをま

ずやってみることが大切」、そして「スタートアップできるまで継続してほしい」など、フォーラム後の意欲あるメンバーが3回の勉強会で具体的なノウハウや実践者の話を聞き、話し合いを重ねることで、「やってみたい」「関心がある」とに向けて動き出しそうな様子が見られた。

3月25日には、希望者を募って新潟市の「実家の茶の間・紫竹」を視察する予定。24年度も協力していきたい。

(鶴山 芳子)

3回目住民勉強会を開催

■西海市(長崎県)

〔2月19日〕西海市は昨年10月に3回目の住民フォー



ラムを市全体に働きかけて大瀬戸町で開催した。その後も勉強会を重ね、3回目の今回は稲葉ゆり子氏（静岡県袋井市、たすけあい遠州代表・当財団評議員）を招いての勉強会となった。

2年前に同県波佐見町のミニフォーラムで稲葉氏の講演を聞いたことがきっかけとなっていた。今回はチラシを作り、あらためて周知を行い50名以上の住民が参加。稲葉氏の講演を熱心に聞き、たくさんの質問が出る活発な勉強会となった。

稲葉氏は活動を始めて30年近く。きっかけは「目の前に見えたから、すぐ近くで聞こえたから、気になり足を止めて一歩へ」とのこと。学校事務をしていた40

代の頃、子どものことが女性たちの負担になる様子を見て、「私にもできることがあるかな」と考え、51歳で仕事を辞め、働く女性の支援に踏み出した。そして「自分がしてもらってうれしいこと」とお惣菜作りを一人で始めた。その話を見た人、聞いた人が「手伝う」と加わった。また、「たすけあい遠州」での助け合いと、コロナ禍にスタートした地縁での「高南の居場所あえるもん」の立ち上げと助け合いについて。また、

状況の変化により柔軟に活動を変化させること、さらに稲葉氏自身が体調を崩した体験、仕組みがあつてよかったというさまざまな人たちのエピソード等も紹介

された。特に「現在は、誰よりもありがたいをもらっている」「会話の中にあるがとうがあると、信頼関係やつながりが濃くなる」との話に参加者は熱心に聞き入った。

質疑応答では、「助け合いの仲間づくりは、仲良しこよしではうまくいかない。同じ目的を持つ人がいい」「楽しいとは、役割があること」「『あえるもん』は

班内回覧で320万円の出資金が集まり2年で返した」「分かち合うことが好きである」など稲葉氏のさまざまな回答が参加者の理解を深め、心を打った。

同市では、大瀬戸地区は3月に最終となる4回目の勉強会を行う。また、24年度は大島地区での取り組みを予定している。

（鶴山 芳子）



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

厚生労働省 地域づくり加速化事業 第2回アドバイザーミーティングに出席

〔2月5日〕厚生労働省の地域づくり加速化事業「第2回アドバイザーミーティ

ング」がオンラインで行われ、鶴山と岡野が出席した。参加者はアドバイザーなど

24名。

今回のミーティングでは事前質問（課題）が出され、冒頭、事務局から事前質問についての概要報告があった。その後、グループに分かれて各支援市町村での支援状況を報告。事前質問のうち、①効果的な支援とその内容、②支援にあたり難しかったこと、を中心に意見交換を行い、4グループからそれぞれ話し合った内容を発表して全体共有した。主な発表内容は、「目的が明確になり、共に進める姿勢ができた」「関係者が集まり、他職種でチームを組んで進めていく体制が取れた」等、この事業の効果も挙げられた一方で、「関係者の多さから来る全体的

な目線合わせの難しさ」「支援終了後のフォローや継続性の検討が必要」等、今後に向けての課題も挙げた。

多くの市町村では、当ミーティング後に最終支援となる3回目の支援が行われる。各アドバイザーは今回

■地域づくり加速化事業に協力

■壬生町（栃木県）

〔1月25日〕壬生町で老健局主導型の地域づくり加速化事業3回目の伴走支援が行われ、支援チームとして参加した。最初に健康福祉課の井澤隆課長からあいさつがあり、続いて「町の思い」として町が考える介護予防の方針について、担当

の意見も参考にしながら、支援を進めていくこととなる。特に今回の意見でも出ていた、支援終了後のフォローについては、アドバイザーだけでなく、厚生局や県との関係性の維持なども意識して取り組む必要があると感じた。（岡野 貴代）



の加藤桜氏から説明があった。次に当財団よりミニ講座として、住民主体の地域づくりについて、やらされ感を払拭するための仕掛けと行政の後方支援などについて事例を交えて伝えた。

その後、村井千賀アドバイザー（石川県立こころの病院認知症疾患医療センタ

1副所長）の進行でグループワークを行った。地域包括支援センター職員、主任ケアマネジャー、サービスク事業所、社会福祉協議会（SC含む）、町担当課職員、支援チームが2グループに分かれて「地域の住民の立場で課題を出し合い、できることと支援してほしいこと」を話し合った。地域の実情や課題を共有し、その課題解決に向けた多様なアイデアを発表で共有した。

壬生町はこれから、介護予防ケアマネジメントを充実させながら、多様な通いの場を広げていく。町の強みである自治会をベースとした取り組みを生かすことが大前提だが、人と人との

関係は、町の中心部、農村部といろいろであることが共有され、モデルとしての通いの場をどう広めるかという戦略が必要、という意見も出された。3回の支援で話し合った行政、社協、包括などの皆さんが今後、推進チームをつくり戦略を立てて進めていく動きに期待したい。（鶴山 芳子）

■上勝町（徳島県）

【1月31日】上勝町で老健局主導型の地域づくり加速化事業3回目の伴走支援が行われ、大坂純氏（東北子ども福祉専門学院副学長）、酒井やよい氏（NPO法人ふれあい福祉の会 山びこへるぶ理事長・さわやかイノストラクター）、当財団

の鶴山が支援チームとして参加した。最初に厚生労働省老健局の延郁子氏より事業説明。続いて町住民課より「上勝町の現状及び今後していきたいこと」として、これまでの取り組みを通じて「住民主体のミニサロンを歩いて行けるところにづくっていきたい」との話があった。

グループワーク「上勝町の高齢者がいつまでも元気で居続けられる、居場所とは」では、鶴山の進行で町の関係者や支援チームも一緒に議論した。事前の支援チームの打ち合わせでは、住民主体のミニサロンの展開についてグループワークをどう進めるかの議論に時間がかかった。しかし、大

坂氏によるミニサロンを実施した住民へのインタビューでその悩みが一気に吹き飛んだ。町は1月初めにお試しによるサロンを実施したところ大好評で手応えを感じ、次の展開を検討していたところ、住民は「町が来なくても自分たちでやるし、次の集落の人にも伝えたいから大丈夫」と発言。その自発性ある行動力に拍手が起こった。その後のグループワークで、「各集落でどう広げていけるか」を話し合ったが、主体的な人を見つけることで広がるということを共有できた。

3回の支援を受け町住民課の榎本崇史氏は「住民と協働しながら広げていき、介護予防についても啓発し

ていきたい」と発言。人口約1400人の中山間地の町で集落ごとにミニサロンを立ち上げ、地域でのつながりと助け合う関係が広がっていくことに期待したい。（鶴山 芳子）

■新発田市（新潟県）

【2月1日】新発田市で厚生局主導型の地域づくり加速化事業3回目の伴走支援が行われた。同市のテーマは、総合事業サービスク（短期集中予防サービスク所型）と生活支援体制整備事業。サービスクは、対象者の把握、利用者拡大が進まない、卒業後のつなぎ先が少なく重度化してしまう等の課題。生活支援体制整備事業は、小学校区17地区

において第2層協議体の体制構築が思うように進んでいないことと、住民主体の助け合いの広がり弱いことを課題とし、支援に手を上げた。同市はこの間、伴走支援での気づきを生かし議論を重ね、熱心に取り組んできた。サービスCは医療経済研究機構の服部真治氏、生活支援体制整備事業は鶴山がアドバイザーを担当している。

同市は2016年から生活支援体制整備事業に着手。第1層協議体を既存の会議に位置付け、年に数回開催して第2層づくりを進めていたが、行政の異動、SCの交代、コロナ禍と、多くの自治体も経験してきた経緯を経て上記のような課題



を解決したいと考えている。1回目の支援は、関係者で「目指す地域像」を話し合うところからスタートしたが、第1層は協議会であったこと、また、戦略が不足しているという気づき、さらに地域で暮らす住民が望む暮らしを実現するために住民の声を聞くことが大切、という大きな気づきも

あった。2回目の支援は、第1層に参加する多様な担当課で連携して何ができるかについて話し合うグループワークを実施。事業実施が目的ではなく地域の暮らしのために活用するものという気づきが生まれた。

そして今回の3回目の支援では、多様な担当課、組織、団体で「一人も取り残さない地域の実現」に向けてこれまでやってきたことを出し合い、一緒に取り組んでいけること、そのために必要なことを話し合った。今回のグループワークの議論が活発に行われ、住民主体の地域づくりに向けて理解が進んだポイントは、行政がこれからの地域に向けてどうしていききたいかの姿

勢を示したこと。また、自治会や民生委員、老人クラブとして参加した「本気でこれからの地域の暮らしを考えている住民」の発言である。過疎が進む集落で、若い世代も一緒に話し合う取り組みを始めている第2層協議体からは、「もっと私たちに任せてくれればいい」との発言も。

覚悟を持ち、未来へ向けた取り組みを始めている住民たちを見つげながら、住民主体の地域づくりの推進とサービスの充実が連動した地域づくりが進んでいるだろう。(鶴山 芳子)

■大館市(秋田県)

〔2月13日〕老健局主導型の地域づくり加速化事業の

テーマ設定型として、「住民主体のサービスBの推進」に取り組んできた大館市の2回目の支援。これまでの議論から、第1層・第2層

SCらが多様な組織や団体に声をかけ、目指す大館市の姿「一人ぼっちにさせない地域の実現」を目指して、一緒に何ができるか話し合うグループワーク「大館の課題解決プロジェクト立ち上げに向けたワークシヨップ」が行われ、市内から50人以上が集まった。

主催者あいさつ、厚労省より事業説明、同市長寿課より「大館市における現状と取り組み」について説明があり、続いて当財団より「自分事と思ひ共に地域づくりを進めるため」のグル

ープワークに向けた事例紹介を行い、グループワークを進行した。

同市は第1層・第2層のSCが連携して地域に入り、住民主体の助け合う地域づくりを推進してきたが、急速に進む人口減少で解散する町内会が開始した。それを第1層協議体も課題として取り上げ、さらに多くの人たちの協力を得て取り組みを進めていく必要性が話されていた。そこで今回は第1層協議体に加えて、市内の大学、子育て支援グループ、婦人会、自治会、商

工会などさまざまな組織も参加して、課題共有と解決に向けた話し合いが行われた。多様な世代と分野による話し合いでさまざまなア

イデアが出され、「これからの大館市をもっと良い地域にしていきたい」「第2層の地域で具体的な取り組みもできそう」という意見

■ かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進委員会に出席

【1月26日】「かながわ高

齢者保健福祉計画評価・推進委員会 令和5年度第3回計画評価部会」が開催され、オンラインで参加した。議題は、(1)「かながわ高齢者保健福祉計画(2021年度～2023年度)」

主要施策の評価について、

(2) 第9期かながわ高齢者保健福祉計画(案)について、の2つ。橋本廸生部会長(横浜市立大学名誉教授)の進行で次の通り議論

も出て盛り上がった。今後ともグループワークを継続して、具体的な地域で住民主体の地域づくりを推進していく。(鶴山 芳子)

した。

(1) 「県の評価として、研修回数や参加者数等の自己評価だけでなく、研修を受けたことにより各自治体で取り組んだ反応が出せないのか」「各自自治体の実施状況等の成果を踏まえ、県のサポートがどうなのかを評価しなければいけないのではないか」などについて議論。(2) 「ロジックツリーを活用した施策の目標やプ

ロセスなどの概念とその評価について」「多様な事業や地域活動の連携について」等、人口減少社

令和5年度 第2回かながわ協働推進協議会に出席

【1月30日】「令和5年度第2回かながわ協働推進協議会」が開催され、構成員として出席した。協議事項は(1) 令和5年度第1回協議会協働事項(ボランティア団体のSDGs活用による企業等との連携促進について)の振り返り、(2) 県のNPO支援策のあり方について。中島智人座長(産業能率大学経営学部教授)の進行で、多様な分野の構成員15名による自由で活発な議論が行われた。

会における都市部への人口流入なども視野に入れた事業推進の必要性等も共有した。(鶴山 芳子)

神奈川県は「基金21」を

はじめ全国でも先駆的なNPOなど非営利活動を推進してきた。しかし、人口減少に伴いニーズが多様化・複雑化していく中、さらに支援を充実していくと支援計画が見直され、それに対して議論した。当財団からは、「例えば法人格がない助け合いなど、幅広い活動が広がるように支援していく必要があるのではないか。また、そのような活動は必ずしも事業拡大を目的

としていないが、地道な活動の継続を目指しており、それらに対する支援策も必要ではないか」などと提言した。議論では「非営利活動を推進する中間支援がより充実していく支援の必要

第3回かながわコミュニティカレッジ 運営委員会に出席

【2月26日】「令和5年度第3回かながわコミュニティカレッジ(コミカレ)運営委員会」が開催され、委員として出席した。議題は、(1) 令和5年度かながわコミュニティカレッジ業務報告及び評価について、(2) 令和6年度かながわコミュニティカレッジ運営業務委託団体選考 第2次審査(創業評価)について。

性」「どのような活動でも支援を受けやすい、敷居が低い仕組みにしてはどうか」「人材育成支援の必要性」などさまざまな意見が活発に出された。(鶴山 芳子)

(1) は、運営団体から31講座の進捗(応募倍率、受講者アンケートの満足度、修了率)の説明や実施した業務の内容、所見などの報告があり、各委員から質疑応答があった。

(2) は、事前に書類審査をした上で1団体からプレゼンテーションがあり、各委員から質疑応答を行った。その後、伊藤真木子委員長

（青山学院大学コミュニケーション人間学部コミュニケーション人間学教授）の進行で、審査に向けて議論を行った。

コロナ禍を経てオンライン講座という手法もマスターし、多くの講座は定員を超える参加状況となっている。その中で、より良い今後の地域づくりにつながる地域活動への参加とリードできる人材の育成につながるようにと議論が白熱した。

令和6年度のメインテーマは、「地域での助け合いが広がる社会づくり」。コミカレ運営委員会ではこれまでも中長期の目標を話し合い、また、時代に合ったテーマを打ち出し講座編成につなげる取り組みをしてきた。7つの幅広い分野で

30を超える講座が企画運営されていく中で、今後も多様な情報を集めながら時代に即したテーマの講座とな

社会参加推進事業

社会人地域共生活動参加推進プロジェクト

高齡社会NGO連携協議会役員会を開催

〔2月27日〕「2023年度第4回高齡社会NGO連携協議会（高連協）役員会」を、オンライン併用で開催。

一般社団法人日本老年医学会名誉会員・元理事長の大小内尉義氏と、当財団の清水肇子理事長の両代表、理事5名、監事1名の計8名、その他・参与1名が出席した。議題は、(1)2024年度事業計画(案)及び予算について、(2)その

るように、知恵を出し合っ
ていきたい。

（鶴山 芳子）

他報告及び意見交換。

まず事業計画(案)として、1・政策提言及びその

ための調査事業は、①第66
回日本老年医学術集会
（6月13日(木)～15日

(土)於・愛知県)の初日

に、高連協と日本老年医学会共催で「老年医学の成果の社会実装をめざして」と題した90分間のセッションを実施する。共同代表の大内氏と清水理事長を含めた4名の登壇者によるシンポジウムを開催することとし

役員退任のお知らせ（3月31日付）

理事・事務局長 内田 信幸さん

内田さんには理事および事務局長として、3回にわたる大規模な全国サミットや昨年のオンラインフェスタの実施をはじめ、財団内外に向けて多大な貢献をしていただきました。これまでご支援いただきました皆様には、あらためて御礼申し上げます。

た。また、②高連協の理念
実現及び高連協の活動発信
を目的に、当年度調査事業
として、会員団体を通じた
オンラインアンケートを活
用した提案・提言を新たに
実施することとした。実施
時期及びテーマは、年度後
半をめぐりに社会状況を踏ま
えて役員会で決定する。

2・手上げ事業は、現段
階では当財団より「いきが
い・助け合いオンラインフ
ェスタ2024」の承認を
得て、今後他団体から応募
があれば受け付けることと
した。

3・広報事業は、引き続
き高連協の実施する事業及
び会員団体が行う活動をホ
ームページ等で発信する。

4・その他事業は、高連

協創立25周年として冠事
業・イベントの開催有無を
検討することとした。

本役員会の意見を踏まえ
た事業計画及び予算案を作
成し、次回第5回役員会
(3月12日)を経て、3月
18日の総会で諮らせていた
だく。

(2)その他報告及び意見
交換は、今後の高連協の立
ち位置、方向性として少子
化対応を含めエイジコミュ
ニティとしてのあり方も検
討すべき、との意見があり、
引き続き役員会で議論を深
め方向性を決めることとし
た。

(玉置 英明)



入退職のお知らせ

【入 職】

■ 事務局長 (4月1日付・入職3月1日) 大石 敏晴

私は、約35年間、保険会社に勤め相互扶助で成り立つ保
険がもつ社会的な役割を誇りにし、お客様の経済活動や日
々の生活を支える仕事に携わってきました。定年という人
生の転機においても「助け合う」という思いのある仕事に
就けることを願い、今般、さわやか福祉財団に入団させて
いただけたことを心から感謝しています。

当財団では、事務局として財団の理念の実現に向けて
日々尽力されている皆様と働けることを誇りに思うととも
に、そのサポートに精一杯努めさせていただきますので、
どうぞよろしくお願い申し上げます。

■ 事務局 (2月1日付) 中村 雅子

事務局職員として入職しました。どうぞよろしく願ひ
いたします。

【退 職】

■ 事務局 (3月31日付) 徳間 康晋さん

徳間さんには、事務局職員としてIT推進、データの構
築等で活躍していただきました。大変お疲れ様でした。

■ 定年後研究所主催 「社会貢献領域 シニア人材活躍セミナー」に参加

〔2月29日〕一般社団法人定年後研究所主催「社会貢献領域 シニア人材活躍セミナー」がオンラインで開催され、当財団の清水肇子理事長と玉置が登場した。同研究所所長の池口武志氏には、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」で「シニアの社会参加」の入学ぼう編Vへ語ろう編Vに登壇いただいた経緯がある。

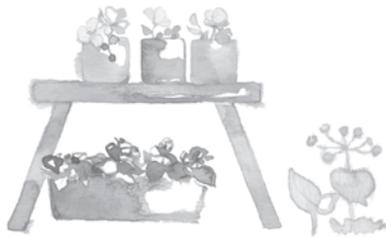
本セミナーは、昨年11月と今年1月の2回にわたり開催された同研究所主催「シニア活躍推進研究会」を受けて、シニア社員の社会貢献領域での活躍の可能性をさらに学びたいという大手企業の人事部門と関連部署の要望を踏まえて開催。17社23名が参加した。

プログラムは、①「当セミナーの主旨」（池口氏）②「シニア人材に社会貢献領域で活躍頂く意味合い」（清水理事長）、「社会福祉法人への転職事例・社会人基礎力が活かせること、転職者の声」（植草学園大学副学長・社会福祉法人千楽副理事長の野澤和弘氏）③「民間企業から社会福祉の世界へ」体験者発表「転職の経緯、福祉領域への印象、やりがい」（玉置）。オンライン開催ではあつ

たが、熱心に視聴する参加者の様子から、社会貢献領域での人材活躍を検討する思いが伝わってきた。団体運営者としての清水理事長の話と、企業OBとして福祉分野へのいきがい就労に転身した私の話が参加者の参考になり、少しでも企業から社会貢献領域への転身や出向が増えること、そして何より転身した人のいきがいやキャリアにつながることを願う。財団の社会参

加推進事業にもつながるよう、同研究所との連携を一層深めていく。

（玉置 英明）



所務より 事だより

●パート職員として長年、財団に貢献してくれたHさんがボランティアに転じて1年。今は、地元のママ友から始まったというテニスサークルで楽しみながら地域で絆を育み、週1回財団にも来てくれている。充実したシニアライフを送ってもらいながら、今後ともみんなと一緒に財団を支えてくれたらうれしいな。

2024年度

※2024年3月21日現在の予定。

金額の数字は各事業の直接事業費予算額、1万円未満は省略しています。

実施事業・プロジェクトをご紹介します。

2024年度の実施事業・プロジェクトの予算が決定しました。

新年度も、地域共生社会づくりに向けて財団一同邁進いたします。

皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

ふれあい推進事業

2億3992万円

- ① 地域共生推進・助け合い創出プロジェクト
- ② 地域づくり生活支援コーディネーター・協議体支援プロジェクト
- ③ ブロック等との協働戦略プロジェクト
- ④ ふれあいの居場所推進プロジェクト
- ⑤ 立ち上げ支援プロジェクト
- ⑥ 復興支援プロジェクト

社会参加推進事業

3017万円

- ① 社会人地域共生活動参加推進プロジェクト

情報・調査事業

1億583万円

- ② 子ども育成支援プロジェクト
- ③ スポーツふれあいプロジェクト
- ④ 民間支援創出プロジェクト
- ① 情報誌発行プロジェクト
- ② 統括広報プロジェクト
- ③ 調査政策提言プロジェクト

収益事業

1884万円

- ① 不動産賃貸等事業

みんなのひろ場



がんサロン
それぞれの居場所に

堀内 玲子さん
橋本 美恵さん

山梨県

昨年12月、3回目のがんサロンを開催した。がんに罹患した人、患者を支援する立場の人が集まり、悩みや考えを話す場所、自分の居場所があること、何でも話していい場所、安心して過ごせる場所という思いから「いい場所、居ばしょサロン」と名前が付いた。

この日は、がんと診断されたAさんとその家族、家族の一人ががんと診断されたB家族が来られ、Aさんは薬の副作用への対応を聞き、また、

自分の病気の受け止めを話したいという。B家族は、家族への関わり方が分からないのでどうしたらよいか、このこと。

話を聞くうち、Aさんの子どもとB家族の子どもが同じような年頃で、Aさんが気になっっている様子がうかがえたので、両者同意の上で一しょ話をすることになった。

Aさんが自身の体験や病気の受け止めを話し、B家族が共感しながら時間が流れた。サロンだからできる当事者同士の話し合いの実現である。

がん治療において、患者は入院・手術をして退院を一区切りの目標としている。そして自宅での生活が始まると「あれ、こんな感じだったかな?」「入院前と違うけど、

どうしたらいいのか?」「生活のことを誰に相談すればいいの?」と戸惑うことがある。そんな悩みを話してヒントを得て、自身の生活に生かせることを目的としたこのサロン。それぞれがそれぞれの立場で、居場所として利用してくれることを願っている。

「いい場所、居ばしょサロン」のご紹介をありがとございました。治療に向き合う勇氣を持ち、日々の不安を柔らげ、具体的に解決するためにも、人とのつながりは本当に大切なもの。どうぞこれからも活動の輪を広げていってください。





『さあ、言おう』投稿募集

あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 地域支援事業について
- 生き方について など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添えください。大変参考になります。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵

はり絵・池田げんえい



「春桜」

編集後記 ●「活動の現場から」は、佐賀市久保泉町の取り組み。活動の内容もさることながら、近隣地区への助け合いの広がりに注目しました(P4~)。●認知症の人が行く場所、することがある場所、そしてパートナーが活躍できる場所として小さな農園を取材しました(P11~「こんな活動やってます!」)。●「地域の子もたちは地域で守る」、その一心で始めた活動が地域で必要とされ、10周年を迎えました(P14~「子どもと一緒に地域で輝こう」)。●5月号より、新しいエッセイ2本がスタートします。どうぞお楽しみに! (P26)。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

島
信一朗

インクルージョンとは「優しさの波紋」

今を生きる私達がすべきは

未来を生きる子どもたちの笑顔を守ることに

そのまた未来の子どもたちに心の笑顔を届けることに

世の中がインクルージョンの笑顔に満たされた時

はじめて真の平和は訪れる



- インクルージョン未来推進機構代表
障がい者スポーツ活動・文化活動を実践し、
これまでに内閣総理大臣表彰、国土交通大臣
表彰や法務大臣表彰等を受賞。



同推進機構プロモーション映像「インクルージョンは子どもたちの笑顔から」
(ナレーション：増田明美さん)

（お楽しみ） 4月号

通巻368号 2024年4月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
取材協力 七七舎
イラスト すずきひさこ
レイアウト 菊池ゆかり
印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

みんなで 誰もが安心して暮らせる 地域共生社会をつくりましょう

新年度も、助け合いの地域づくりをさらに推進してまいります。

さわやかパートナー（賛助会員）として、
ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、どなたでもお申し込みいただけます。

税制優遇措置もあります。詳しくは、本文46ページをご参照ください。

◎1回ごとに金額を自由にお決めいただく一般ご寄付も、随時受け付けております。

■ ご寄付全般に関するお問い合わせ ■

電話 (03) 5470-7751

メール mail@sawayakazaidan.or.jp